



(曾許乃御立神社の御神木)

こそ、過ぎ去った日々に思いを馳せる浜名湖ロマンだと思う。以上。

〔周辺所在地〕

〒431-1209 静岡県浜松市西区舘山寺（内浦）

〒431-1202 静岡県浜松市西区呉松町（曾許乃御立神社）

3

井の国と天白磐座遺跡・編

浜名湖を支える水の神・天白磐座遺跡！

■井の国と天白磐座遺跡。

NHKの大河ドラマ“おんな城主直虎”の舞台になっている引佐町井伊谷（いいのや）は、古代から南北朝時代を経て現在まで、歴史の節目にその名が出てくる事で知られている。

この井伊谷は、浜名湖北部の引佐細江から、都田川の気賀で合流した井伊谷川の上流にある。

更に上流で分岐した神宮川沿いには、渭伊神社（いいじんじゃ）や天白磐座遺跡があり、古代この地域を井の国と呼んでいたようである。

驚くことに井の国は、浜名湖ロマンの人物像の眼の涙腺の位置にあり、常に浜名湖の瞳を潤す役目を持っていたようである。

なぜ涙腺の位置に井の国であるのか極めて不思議であるが、古事記では井戸や水の女神（泣沢女神＝なきさわめ）は、伊邪那岐命（いざなぎ

のみこと) の涙より生まれた神とされている。



(天白岩倉遺跡を囲む神宮川の支流)



(渭伊神社の後方に天白岩倉遺跡がある)

井の国が浜名湖の瞳を潤す役目があると考ええると、浜名湖で幸運を得た徳川家康の四天王として、天下取りを支えたのは確かに井の国の出身である井伊直政である。

まさに涙腺の役目を果たしたと考ええると、古事記の話に親近感が湧いてくる。

【渭伊神社と天白磐座遺跡】

天白磐座遺跡は古社である渭伊神社の北側の薬師山頂上にある。薬師山は三方を川で囲まれた標高約40mの低い山で、頂上には大岩が並び、磐座全体を構成している。



(薬師山の頂上にある天白岩倉遺跡)

この地域一帯には多くの古墳が存在しており、古代、生活の為の治水は極めて重要な事柄であり、天白磐座遺跡は人々が末長く繁栄する事を願い、祈願した古代の祭祀場の様である。

現在でも磐座の巨石に手を当て、目を閉じると、頭上から何かが降りてく

る気配を感じる魅力的な所である。

浜名湖北部では、三ヶ日原人で知られているように、縄文時代から既

に多くの人々が暮らしていたことがわかる。古代、都田川流域でも多くの人々が暮らしていたようで、引佐町は銅鐸の発見地として日本中に良く知られている。

特にこの時代に思いを馳せると、浜名湖の水辺で暮らす人々は漁労に従事し、井の国で暮らす人達は田や畑を耕し、季節になるとそれぞれの産物を持ち合い、交流していたのではないだろうか。

井の国の人達は交流後に、受け取った産物を船に積んで都田川を遡り、井の国の山里の人達と分け合ったのかもしれない。その時には当然、渭伊神社に報告と同時に繁栄を願ったのではないだろうか。

山里で暮らす人達は、日々、山間からの清い水の恩恵を受けることに感謝し、銅鐸を鳴らし、黄金色に輝く稲穂の中で男女が祭事に酔い、末永く続くことを磐座へ願ったのかもしれない。

縄文時代から弥生時代の前期頃までは、大変平和な時代が長く続いたようであるが、浜名湖に多くの外来船が来るに至り、突然、祭事に銅鐸を使った人々は銅鐸を手放し、消えて行ってしまった事はその時代にどのようなことがあったのか、今は知る由もない。

唯、その後も山間からの清い水の流れは止まず、新しい時代と共に文化が再興し現在に至っていることは喜ばしい事である。

因みに、長く徳川幕府の重心であり明治維新前夜まで幕府の大老として国を動かしてきた井伊直弼の井伊家は、千年前から井伊谷が本拠地であった。

その始祖である藤原共保は、浜名湖の瞳に位置する村櫛で育ち成人している。同じ浜名湖の恩恵を受けたのは徳川家康と同様である。

不思議なのは、つい最近まで陸の孤島と呼ばれた村櫛に、当時、都の出先機関が置かれていたことである。その時代、陸の孤島であったこの場所をなぜ選択したのか、今も不思議である。もしかするとこの地が浜名湖の瞳輝く所である事を、十分知っていたのかもしれない。

〔周辺所在地〕

〒431-2212 静岡県浜松市北区引佐町井伊谷616-5（遺産センター）
〒431-2212 静岡県浜松市北区引佐町井伊谷（渭伊神社・天白磐座遺跡）

4

細江神社と潯標・編

渡来人の香り漂う古代港、細江！

■細江神社と潯標。(みおつくし)

浜名湖の北側にある引佐細江の都田川流域は、古代最も神聖な地域として栄えたことが伺える。その証として陸上では、日本有数の銅鐸の出土地であり、また多くの古墳が見られる所である。

そして水上に於いては1300年前から都田川河口に、潯標が設置され、多くの船が出入りしていたことを伺わせる。

古代の船を示すものとして、愛知県松阪市の伊勢湾を見下ろす位置にある、宝塚古墳の前方後円墳から、日本最大の船の埴輪が出土している。伊勢湾と三河湾は湾内でつながり、東側には浜名湖がある。船による文化圏の構成としての地理的条件は恵まれていたと思う。



(宝塚古墳の船の埴輪)



(埴輪の出土位置)

伊勢湾の口から浜名湖の口までは、遠州灘沿いで概ね40 k mの位置にあり、視界的にも問題のない距離である。陸路が整備されていない当時にとっては、船による移動が最適な手段であったようである。

遠州灘から浜名湖に入り、引佐細江に向かう船は、当時も今も湖西連峰の山々から見る事が出来る。頂きから大海原や湖面を走る船の姿を見て、当時の人達は嬉しさを一足先に知らせたり、また、他国の船に驚きを感じたり、思いは様々だったと思う。

現在も浜名湖を取り巻く周囲の山々から、当時の緑に包まれた湖畔と青い水面の中を、頑強な男達が櫂を漕ぐ姿が思い浮かぶ。

新天地を求めて渡来した船に思いを馳せることが出来るのが、この浜名湖である。

【細江神社と角避比古神社】

古代、浜名湖の海岸近くには、海と湖を守護する為の神として、角避比古神（つのさかひこのかみ）を祀る神社があったと伝わっている。現在でも所在地は不明であるが、角避比古神社は陸路そして遠州灘からも、浜名湖の入り口として見える位置にあったのではないだろうか。

東海道の旅人が浜名湖の往来時に参拝したという格式の高い角避比古神社は1498年天変地異により神社の形が崩れ、浜名湖一円に分散し、最終地として気賀の赤池に漂着し、その御神体を祀ったのが細江神社と言われている。



(角避比古神を祀る細江神社)



(御神体の漂着の図)

現在、浜名湖畔にある湊神社、細江神社、猪鼻湖神社のほか、周辺の神社の多くがその流れを汲むというほど、格式の高かった神社のようである。

この出来事により角避比古神は、細江神社を初め広く浜名湖一円に形を変え、新しい力として生まれ変わり、浜名湖周辺から起きたといわれる多くの成功事例から考えると、時空を超えた影響力を発揮したのかもしれない。

細江神社の参道を歩き、参拝後に清々しい気持ちになるのはそのせいかもしれない。

【湊標・みおつくし】

湊標は浅瀬を知らせるものであり、その水域の状況を知らない船乗りには警告する為のものである。そうした事から察すると、引佐細江には遠方より多くの船が出入りした事が推測される。

古来、船の出入りが頻繁であった大阪でも、多くの湊標が河口に設置

されていたとされ、湊標住吉神社も大阪に鎮座していた。現在、大阪市は湊標を市章としており、それと同様に細江町の町章も湊標であった。



(引佐町の町章・みおつくし)



(細江湖の都田川付近にある湊標)

遠い昔に都田川を中心に神聖なる文化圏が東に広がり、平和な日々が続いていたと思われる。山里の猟で暮らす人も農耕で暮らす人も互いに交流し合い、地域一帯の調和が保たれていたのではないかな。

時に祭り事に際して、地域一帯から多くの人々が集まり、その中でも銅鐸を船に寄せ、鳴らしながら川上へ遡上する船の姿は何とも言えない光景だったと思う。この引佐細江の地は、湊標を見ながら古代に思いを馳せる事ができる魅力的な場所である。

〔周辺所在地〕

〒431-1305

静岡県浜松市北区細江町気賀996

(細江神社)

(引佐細江水面＝みおつくし)

5

浜名神戸と浜名惣社神明宮・編 伊勢神宮の遷宮候補地だった三ヶ日の地！

■ 浜名神戸と浜名惣社神明宮。

浜名湖北部の猪鼻湖の北側に三ヶ日の地がある。昔から東西への往来に際して、浜名湖の北側は、海側よりも地域変化が少なく、安定して通行できる道として、重要な意味を持っていた地域である。また三ヶ日の地は古代から浜名神戸と呼ばれ伊勢神宮領であった。

船の信頼性が極めて低いと思われる時代に、伊勢神宮では対岸にある渥美半島の田原市に田原神戸、そして浜名湖畔に浜名神戸を逸早く領していた。

本来、領地を広げようとするれば、伊勢神宮に近接した陸伝いに造るものであり、まして古代に海を渡る遠方の地に逸早く造った意味は何だったのだろうか。



(右側が渥美半島の先端の伊良湖崎。
左側が神島、その先が伊勢神宮である。)

伊勢神宮は天照大御神を祭る太陽神といわれている。

当時、太陽は生活を営む為の全てであり、とりわけ日の出は最も重要な事柄だったと思う。

田原神戸や浜名神戸の方角は富士山を含め、伊勢神宮にとっての日の出の道であり、当時の人達にとっては大変重要視した事だと思う。

いずれにしても浜名湖から渥美半島（中央に田原神戸）を通り、伊勢神宮までの光の道は、古代人にとって神聖であり、大きな意味を持っていたのかもしれない。まさに浜名湖ロマンであり、魅力的な謎解きを感じてしまう。

【浜名惣社神明宮と初生衣（うぶぎぬ）神社】

浜名湖北部の三ケ日の地には不思議な神社がある。多くの浜名湖畔にある神社の社（やしろ）は、概ね浜名湖の方角を向いている。しかし浜名惣社神明宮は別の方向を向いている。それは伊勢神宮である。



(浜名惣社神明宮)



(石段の上にある本殿)

浜名惣社神明宮の神社誌を読むと、この神社は“日本書紀”で語られている伊勢神宮の“元伊勢”だったと記載されている。

伊勢神宮の祭神である天照大御神は、奈良県桜井市の三輪山の麓に鎮座していたが、天照大御神にふさわしい最高の“宮地”を探すという事で、70年前後をかけて、大和、伊賀、近江、美濃、尾張を巡り、御船で三ケ日の地に来られ後に、伊勢の五十鈴川の岸边に移られたと言われている。こうした御縁もあり伊勢神宮とは深い関係にある神社である。

しかしなぜこの地に来たのだろうか。尾張からは船で遠州灘、浜名川、浜名湖、猪鼻湖、そして川を遡り、浜名惣社神明宮の領内の岸边に着いたのかもしれない。或いは、三河湾から陸路で本坂峠を越えて、更に船により川を遡ったのかもしれない。

いずれにしてもどこを目指していたのだろうか。仮説であるが、浜名湖から悠然と見え、山頂からも浜名湖や遠州灘を見渡すことが出来る、神々しい富幕山（とんまくやま）を目指していたのではないだろうか。

この山は浜名惣社神明宮の上流にある山で、富幕山周辺には古くから渡来人（新羅集落）が住んでいたようである。隆盛期には中腹に新羅堂（幡教寺跡）が設けられ、規模が大きくなり地元民との争いが生じたとの事である。

当時は神々の有様が様々で、異民族であるがゆえに宗教的な事柄が、争いの原因だったかもしれない。いずれにしても当時のこの地域は魅力的な場所で、天照大御神にふさわしい最高の“宮地”の候補の一つであったのかもしれない。

初生衣神社は浜名惣社神明宮の川を挟んで北西側に鎮座している。この神社も伊勢神宮と御縁の深い古社であり、伊勢神明初生衣社とも呼ばれている。



（初生衣神社）



（織殿）

祭神は天棚機姫命（あめのたなばたひめのみこと＝機織の祖神）であり、古くから伊勢神宮に神御衣（かんみそ＝おんぞ）を納める神事を担っている。この神御衣は天照大御神が天岩戸から出てきた時に着たといわれる衣の事である。

毎年、初生衣神社から奉獻する神御衣は、一時的に浜名惣社神明宮にある天棚機姫命社に納め、再び初生衣神社に戻し“おんぞ祭り”を行っている。

川を挟んで隣接している浜名惣社神明宮と初生衣神社は、元は一つの大きな神社だったのではないだろうか。

そして不思議な事に、浜名惣社神明宮は天照大御神を主祭神としているが、現在、摂社になっている太田田根子命（大国主命の系列）が、以前は主祭神だったと推定されると神社誌に記載されている。

まさに古事記に於ける日本建国の国譲りが、同時代の神社では、神社譲りが行われていたのかもしれない。歴史は何を物語っているのだろうか。

初生衣神社は現在、遠州織物の発祥の地として織物関係者に知られるようになった。同時に遠州地域に織物産業を根付かせた功績があったように感じる。

そしてこの織物産業が基礎となり、日本の主産業である自動車関連事業を生んだのは、まさに初生衣神社や浜名惣社神明宮の御利益かもしれない。

〔周辺所在地〕

〒431-1414 静岡県浜松市北区三ケ日町三ケ日122

（浜名惣社神明宮）

（浜名神戸＝三ケ日周辺）

6

瀬戸と猪鼻湖神社・編

猪鼻湖は“井の国の花の湖”だったのか！

■瀬戸と猪鼻湖神社。

猪鼻湖、時に猪鼻浦と呼ばれた湖は、浜名湖の北西側に位置しており、西から北にかけて山が連なり一年中緑の木々に囲まれた、比較的穏やかで風光明媚な北の湖である。

猪鼻湖の南側の口が浜名湖と繋がり、瀬戸（猪鼻瀬戸）と呼ばれ、その場所に猪鼻湖神社がある。

瀬戸は浜名湖から猪鼻湖に入る比較的狭い水路であり、その為に猪鼻湖は独立した山間の湖のように見える。この辺りには弥生時代から人々が暮らしていたことが貝塚などから知られている。



(猪鼻湖と瀬戸の猪鼻湖神社)

この瀬戸には古くから猪鼻湖神社が鎮座されており、社（やしろ）に向かうには水際を歩くことになるが、その為に独特の参拝気分を感じる所である。

猪鼻湖神社は大きな社はないものの、岩の上に鳥居と小さなお宮があり、緑の木々と赤い橋が湖面全体と調和して大変美しい。

橋の前では太平洋から離れているにもかかわらず、潮の香りが漂い、立ち止まって周囲を見渡すと心落ち着く不思議な場所である。

この猪鼻湖周辺は、古くから山側には神社仏閣が建てられ、猪鼻湖の